

令和 2 年 5 月 19 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K16605

研究課題名（和文）1754-1781年のドイツ哲学における「心の能動性と受容性」

研究課題名（英文）The activity and receptivity of mind in German philosophy 1754-1781

研究代表者

佐藤 慶太 (Sato, Keita)

香川大学・大学教育基盤センター・准教授

研究者番号：40571427

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「心の能動性と受容性」という対概念を軸に、カント、ランベルト、テーテンスの相互影響関係について調査を行った。彼らの関係に着目することによって、次の成果を得た。第一に、カントが心の基礎的な構造を解明するにあたって、当時の経験的心理学の成果を最大限活用していたということ、第二に、カントの超越論哲学の構想が、ランベルト、テーテンス、ドイツ・アリストテレス主義から大きな影響を受けているということ、この二点を明らかにすることができた。この研究成果は18世紀ドイツ哲学史像の再検討を促すものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀以降「理性」を基礎とする価値体系の妥当性を再検討することが哲学の重要な課題となっている。「理性」の可能性を見定めようとする場合、いわゆる「理性の世紀」の議論、特にカントの批判哲学成立までの18世紀ドイツ認識論の展開を見直すことが有効である。しかし見直しを行うとしても、観点が従来のみでは「理性」の新たな可能性を探ることはできないだろう。本研究は、18世紀ドイツ認識論の展開を捉えなおすが、これは認識論史の再構築、ひいては「理性」概念の新たな可能性を探るための基礎を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：In this research project I examined the connection between Kant, Tetens and Lambert by considering the concepts "the activity and receptivity of mind". By focusing the connection, I obtained the following results. First, I showed that Kant investigated the basic structure of mind by making full use of the results of empirical research in psychology. Secondly, I clarified that Kant's idea of transcendental philosophy was much influenced by Lambert, Tetens and German aristotelianism. This research results lead us to reconsider our view of 18th century German philosophy.

研究分野：西洋哲学史

キーワード：心の能動性と受容性 18世紀ドイツ 認識論 カント テーテンス ランベルト ヴォルフ 超越論的哲学

1. 研究開始当初の背景

(1) 18世紀後半ドイツ哲学(認識論)の研究状況

現在の哲学史研究において、ヴォルフの死(1754)から『純粹理性批判』第一版刊行(1781)までのドイツの認識論の展開を「ヴォルフ主義的経験主義」VS「1770年以降のカント」という図式で理解する手法が主流である。さらにこの図式は「経験的」VS「ア・プリオリ」という形で一般化される場合もある。これらの図式は、カントの認識論における「ア・プリオリ」の卓越性を際立たせるものではあるが、経験主義から批判期のカントへの影響関係を隠蔽するという弊害を併せ持っている。近年、上述の枠組みの妥当性を問いなおす研究が現れているが、カントと経験主義との関係を整合的に説明する哲学史の枠組みを提示するには至っていない。

(2) 研究代表者のこれまでの研究

研究代表者は、2012年採択の科学研究費補助金・若手研究(B)「テーテンスの主要著作の読解を基礎としたカントと経験主義との関係の再検討」において、カントとテーテンスの関係について検証を行った。この検証作業のなかで、申請者は、テーテンスは「観察」という方法に依拠しつつ、経験の成立条件となる認識の形式の析出を目指している点で、ヴォルフの立場とは区別されること、1770年以降のカントはテーテンスから多くのアイデアを仕入れ、独自の仕方でも展開したこと、を明らかにした。この研究成果は、1754~1781年のドイツの認識論を「ヴォルフ主義的経験主義の支配」VS「1770年以降のカント」という単一の対立軸のもとで理解することは妥当ではない、ということの間接的に示している。

加えて申請者は、テーテンスの主著『人間本性とその展開についての哲学的探究』(1775:以下『試論』)のうちに、従来のものに代わる枠組みを構築する手がかりを見出した。ここでは「経験的」VS「純粹」、あるいは経験VS理性という対立構図ではなく、「心の能動性と受容性」(『試論』第1巻S.621)という論点を軸に、当時の論争状況が整理されている。すなわち、この論点をめぐって、(A)知性の働きをすべて感覚作用(受容性)に還元しようとする立場(コンディヤックを源とする「感覚論」、ロッシウスなど)、(B)表象能力(能動性)を軸として感覚を「混濁した表象」として処理する立場(ヴォルフ学派の表象能力一元論)、(C)認識を形式(知性の働き)と質料(感覚内容)という枠組みで理解する中道的立場(ランベルト、テーテンス、トマス・リード、1770年以降のカント)という三つ巴の争いがある、という整理がなされている。この整理は、1770年以降のカントが、特にランベルトとテーテンスを、自身と同じ方向性を有する哲学者とみなしていたという事実とも整合的である。ここから研究代表者は、テーテンスの『試論』を立脚点として、「心の能動性と受容性」を軸に1754-1781年のドイツの認識論の状況を読み解く、という研究計画にたどり着いた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「心(Seele)の能動性と受容性」という論点を軸に、1754年から1781年までのドイツにおける認識論の状況を整理し、カントと経験主義との関係を整合的に説明することにある。従来、その状況は「経験的(ヴォルフ主義的経験主義の支配的潮流)」VS「ア・プリオリ(1770年以降のカント哲学)」という対立軸の下で説明されてきた。だがこの図式では、批判期のカントがテーテンスの経験的心理学の強い影響下にあるという事実をうまく説明できない。本研究は、テーテンスが用いる「心の能動性と受容性」という対概念を軸として当時の論争状況を読み解き、カント哲学があるタイプの経験主義と親和性があるとともに、いわゆる経験主義的な立場とは区別されるということを、整合的に説明することを目指す。

3. 研究の方法

(1) 研究の範囲と観点

本研究では、テーテンスが『試論』において活用している「心の能動性と受容性」という概念を軸に、1754-1781年のドイツ哲学の状況を整理する。具体的にはこの枠組みに即して、(A) 感覚論(ロッシウスなど)、(B) 表象能力一元論(ヴォルフおよびヴォルフ学派)、(C) 形式と質料の二元論(ランベルト、テーテンス、カント)、という三つの立場の内実及び相互の関係を明らかにする。まず(A)(B)(C)の立場を整理し、これを踏まえて三つの立場の関係について総括を行う。

(2) 研究の進め方

まず、2014年に刊行された、テーテンスの『試論』のコメンタリー版に依拠して、(A) 感覚論、(B) 表象能力一元論、(C) 形式と質料の二元論の三区分別を研究の準拠枠として整備する。またこの作業を通じて洗い出された必要な文献をドイツで収集する。

次に、上記の準拠枠に沿って、対象となる哲学者の著作を読解する。具体的には(A) 感覚論においては、ロッシウス『真なるものの物理的原因』、(B) 表象能力一元論においては、ヴォルフの『存在論』および『経験的心理学』、(C) 形式と質料の二元論においては、カントの前批判期の著作群および『純粹理性批判』、テーテンス『試論』、ランベルト『新機関』、『建築術構想』の読解が中心となる。

最後に、これまでの研究を踏まえて、三つの立場の関係について総括を行い、1754年～1781年までのドイツ哲学(特に認識論)の展開を再検討する。

4. 研究成果

(1) ヴォルフ主義と次世代の哲学者たちとの関係について

本研究の成果として、この時代のドイツ哲学の構図は「経験的(ヴォルフ主義的経験主義)」VS「ア・プリオリ(1770年以降のカント)」という対立軸で捉えきれない、という当初の見通しが裏付けられたことがあげられる。

1760年代のドイツ哲学の状況を精査すると、この時期から、1781年の『純粹理性批判』刊行時まで、カント、テーテンス、ランベルトの三者が、対ヴォルフ共同戦線を形成していたことが浮かび上がってくる。三者の関係は、往復書簡や以降の読解を通じて裏付けられる。

ヴォルフと上記の三者の対立のポイントは「存在者(ens/Ding)」という哲学の基礎概念の捉え方の違いにあり、これを軸としてヴォルフ学派と次世代の哲学者(ランベルト、テーテンス、カント)が区別される。加えて注目すべきは、三者が、経験的所与を秩序付ける条件としての思考能力の働きを、「存在者」の概念の成立条件として捉える、という点である。これは、ヴォルフ学派において、「存在者」の在り方が概念のみを通じて把握されると考えられていること、概念のレベルでの保証が、実在のレベルでの保証に直通することと対照的である。要するに、ヴォルフ学派とカント(を含むヴォルフの批判者たち)との関係は、存在者を概念のみでとらえるか、認識の条件と経験的所与の協働によって成立するものととらえるか、という対立軸によって理解される。さらにこの対立を「心の能動性と受容性」という、より大きな視点から捉えなおすと、心の能動性のみ VS 心の能動性 + 受容性、という仕方で整理することができるわけである。

この研究の成果は「ヴォルフの形而上学とその批判者たち」(『新・カント読本』所収)において発表された。

(2) カントの超越論哲学の諸前提について

「超越論的哲学」は、認識の可能性の条件を問うカント哲学の別名と理解される場合もあるが、カント自身は必ずしもそのように考えていない。そもそもこの概念は、ドイツアリストテレス主義に由来するもので、カント哲学固有の概念ではない。本研究は、18世紀ドイツ哲学の状況を詳らかにすることを通じて、カントがこの概念を使うことによって、伝統的な形而上学の系譜を意識的に引き継ごうとしていたこと、そして複数の哲学者たちによる共同作業の、いわばプラットフォームの形成を狙っていたことが明らかにした。この成果は「『純粹理性批判』第一版における「超越論的哲学」の構想」(中野裕考ほか編『現代カント研究 14 哲学の体系性』所収)として公にされた。さらに、この研究から、『純粹理性批判』第一版と第二版とで、カントの形而上学構想に変更があること、第一版の形而上学構想では、理論哲学と実践哲学が直接的に連結されることはなく、理論哲学の内部で哲学者間の共同作業が見込まれている、という解釈の方向性を得た。この解釈は、第13回国際カント学会において、「カントの無の表と1781年の超越論的哲学構想」として口頭で発表された。

(3) カントと経験的心理学

カントの同時代の哲学者、特にテーテンスとカントの影響に着目することによって、カントの認識論の核心部である『純粹理性批判』「超越論的演繹論」が、当時の心理学における経験的研究の成果を自らの考察に取り込み、そこで論じられている心の働きの可能性の条件を、「心の三能力の超越論的使用」として明らかにする、という狙いを持っていること示した。カントと経験主義との関係は、単純な対立としても、単純な継承としても捉えられない。経験主義的な研究の成果を踏まえつつ、その基礎的構造をア・プリオリなレベルで示す、という階層の違いを考慮に入れることによって、カントと経験主義との関係を統合的に理解できるようになった。これにかんする研究成果は「テーテンス『人間本性と其の展開についての哲学的試論』の読解に基づく『純粹理性批判』「演繹論」の一解釈」(『日本カント研究』No.19,所収)として公になっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 佐藤慶太 | 4. 巻 19 |
| 2. 論文標題 テーテンス『人間本性とその展開についての哲学的試論』の読解に基づく『純粹理性批判』「演繹論」の一解釈 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 日本カント研究 | 6. 最初と最後の頁 58-72 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 佐藤慶太 | 4. 巻 No.66 |
| 2. 論文標題 テーテンスとカント | 5. 発行年 2015年 |
| 3. 雑誌名 哲学 | 6. 最初と最後の頁 143-159 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 佐藤慶太 | 4. 巻 |
| 2. 論文標題 新人文主義における「教養」と教養教育の現在 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 武重雅文編『若者・政治・大学教育』 | 6. 最初と最後の頁 67-91 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 佐藤慶太 |
| 2. 発表標題 テーテンス『人間本性とその展開について哲学的試論』の読解に基づく『純粹理性批判』「演繹論」の一解釈 |
| 3. 学会等名 日本カント協会（招待講演） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 佐藤慶太 |
| 2. 発表標題 『純粋理性批判』第一版における「超越論的哲学 (Transscendental-Philosophie)」の構想 - ランベルト、テーテンスにおける「超越的 (transcendent)」についての考察を踏まえて |
| 3. 学会等名 カント研究会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 佐藤慶太 |
| 2. 発表標題 テーテンスの観察哲学 (die beobachtende Philosophie) と『純粋理性批判』第一版演繹論 |
| 3. 学会等名 カント研究会 |
| 4. 発表年 2015年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 佐藤慶太 |
| 2. 発表標題 Kants Tafel des Nichts und sein Plan zur Transzendentalphilosophie 1781 |
| 3. 学会等名 the 13th International Kant Congress (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 中野裕考、山蔦真之、浜野喬士、佐藤慶太、小谷英生 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 晃洋書房 | 5. 総ページ数 200 |
| 3. 書名 現代カント研究 14 哲学の体系性 | |

| | |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 牧野 英二編（佐藤慶太は第9章を分担執筆） | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 法政大学出版局 | 5. 総ページ数 422 |
| 3. 書名 新・カント読本 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号） | 所属研究機関・部局・職 （機関番号） | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|